様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１７７０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ１６５５１

研究課題名（和文）日本代表選手の行動および対人認知が青年期のスポーツ競技者へ与える影響

研究課題名（英文）Influence of Japanese national athlete's behavior and interpersonal perception on youth sports athletes

研究代表者
萩原　悟一（Hagiwara, Goichi）

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・講師

研究者番号：３０７３４１４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、トップアスリートが大学生競技者の競技スポーツ傾倒に与える社会心理的影響を検討することであった。本研究の結果、トップアスリートの行動・態度は大学生競技者の競技者アイデンティティーに影響し、そして、競技者アイデンティティーはスポーツ傾倒意図を規定していることが示された。また、トップアスリートから提供されるソーシャルサポートおよび提供が期待されるソーシャルサポートは競技者アイデンティティーを高め、スポーツ傾倒意図を規定していることが示された。以上の結果から、トップアスリートの行動・態度は大学生競技者の競技継続意図に影響を与えていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was examine the social psychological factors influenced intention of sports persistency in collegiate athletes. Especially, this study focused on elite athlete’s affection.As a result of this study, the behavior and attitude of the elite athletes influenced the athlete identity of the collegiate athletes and that the athlete identity effected the intention to sports. In addition, social support provided by top athletes and social support expected to be provided have been shown to enhance athletic identity and formed intention to sports.Based on the above results, it was revealed that the behavior and attitude of the elite Japanese athletes had an influence on the intention of competitive sports persistency in collegiate athletes.

研究分野：スポーツマネジメント

キーワード：競技者アイデンティティー　大学生競技者　トップアスリート　競技スポーツ継続　スポーツ・コミットメント

１．研究開始当初の背景

(1) 競技スポーツ実施と生涯スポーツの関連

先行研究では、高校や大学期の学校における競技スポーツ経験が、将来的な運動習慣に影響を与えていることが明らかにされている（Curtis, McTeer and White, 1999; Tammelin et al., 2003）。青年期の運動部活動やサークル・クラブ活動などの競技スポーツ実施および継続経験が、生涯スポーツの実施行動と深い関わりがあることが示されている（粂野ほか，1979; 中・出村，1992）ことから、将来的な国民の生涯スポーツ実施を促すためにも青年期における競技スポーツ参加に焦点を当てた検証が必要であるといえる。

(2) スポーツ傾倒行動のプロセス

社会心理学分野において、人々の傾倒行動に関するプロセスを提唱した Stryker and Serpe (1982)、Piliavin et al. (2002)、Meyer, Becker, and van Dick (2006)は、アイデンティティーとコミットメントの関連性について検討を実施した結果、特定のアイデンティティーの役割が個人の行動を起こす時に重要とされるコミットメントの程度に影響を与えていることを示している。すなわち、特定の役割に対するアイデンティティーを確立することで、ある行動に対する個人のコミットメントを高め、行動を促進していることが明らかにされている。

スポーツ科学分野においては、それらの理論に依拠し、スポーツにおけるアイデンティティーとコミットメントの関連性について検討が行われている（萩原・磯貝，2013;2014b）。Hagiwara and Isogai（2014）はスポーツ競技者を対象に競技者アイデンティティーとスポーツ・コミットメントの因果関係を検討した結果、競技者アイデンティティーを強く形成している者は、スポーツ・コミットメントの程度が高く、さらに、スポーツ実施程度も高いということを示している。

(3) 競技者としてのアイデンティティー形成要因

競技者アイデンティティーの形成要因については、多様な視点から検討する必要性が示されている。個人および社会志向性などの個人内の心理的要因（萩原・磯貝，2014a）、他者との関係性などの社会的要因（萩原・磯貝，2014b）、個人の所属する文化にある文化的自己観などの文化的要因（萩原・磯貝，2014c）などの視点から検討されている。特に、社会的要因である重要な他者からのソーシャルサポートは競技者アイデンティティーと深く関わっており、世界大会等で活躍する日本代表選手からのアドバイスや指導、激励などのソーシャルサポートの受領経験が青年期の競技者アイデンティティー形成に深く関わっている可能性が推察される。

また、アイデンティティー形成には所属する文化や集団の影響が着目されている。Hogg and Abrams (1988)は、人々は個人が所属する社会や集団の明確化された局面を自分自身のものとして取り入れることにより、個人のアイデンティティーを形成しているとしている。すなわち、スポーツにおいては所属するスポーツチームの成績や地位が高い場合、個人のスポーツに対するアイデンティティーもその成績や地位に合わせて強く形成されるようになることを示している。また、Tyler and Blader (2001)は自分の所属する集団や社会が高地位である場合、人々はそこに所属していることに対するアイデンティティーを強め、行動に対するコミットメントを増大させているとしている。スポーツ観戦においてもひいきにしているスポーツチームを応援することが、アイデンティティーの形成を促していることが示されている（King, 1997；仲澤・吉田，2015）。

以上のことから、オリンピックなどの世界大会における日本代表選手の行動、態度をスポーツ実施者が認知することが、その種目を実施している人々の競技者としてのアイデンティティーを強め、スポーツに対するコミットメントを高めている可能性が示唆される。このように、国際大会等において日本代表選手の行動および態度が、人々の競技実施に関する心理社会的要因に影響を与えていることが予想され、これらを明らかにすることは青年期の競技スポーツ実施に関する心理社会的効果検証の一資料となりうるであろう。

２．研究の目的

近年、わが国では青年期層が主である競技スポーツへの参加人口が減少傾向にあるとされている。青年期において競技スポーツに親しむことは生涯スポーツ志向を促す可能性があることから、競技スポーツ参加に焦点を当てた検証が必要であると思われる。また、わが国では 2020 年の東京オリンピック開催が決定し国民の競技スポーツへの関心が高まり、国際大会等で活躍する日本代表選手に注目が集まることが予想される。そこで、本研究では、オリンピック、世界選手権等の国際大会で活躍する日本代表選手の行動および態度が、わが国のスポーツ実施者に与える心理社会的影響に着目し、青年期のスポーツ実施者の競技スポーツ傾倒意図を検討することを目的とした。

３．研究の方法

本研究の目的を遂行するにあたり、以下の 3 点を研究方法として設定した。

(1) 先行研究の整理や質問紙調査、インタビュー調査から、スポーツ競技者としての意識が向上するような日本代表選手（元日本代表）の行動・態度およびサポート行動を明らかにする。

上記の検討をするため、トップアスリートの態度・行動に関する先行研究（Arai, Ko, & Kaplanidou, 2013; 島本ほか，2013; 竹村ほか，2013）、Web 調査において 45 名を対象

に自由記述調査および、大学生競技者 18 名へのインタビュー調査を行った。なお、Web 調査は以下の手順で行った。Google ドライブを利用し、Web 上で調査票を作成し、SNS を通じて拡散した。調査票は、「スポーツ実施者の意識に影響を与えるわが国のトップアスリートに関する行動」について自由回答形式で質問を実施した。質問文は「あなたが競技スポーツを実施・継続していく上で、わが国を代表するトップアスリートの行動・態度・言動・パーソナリティなどで、あなたの意識に影響を与えていることについて、思いつくだけ自由に回答してください」という文章を提示し、調査対象者には自由記述による回答を求めた。また、インタビュー調査については日本代表選手と直接的に関わる機会があり、指導やアドバイスなどを受けた経験のある者（18 名）を対象として、日本代表選手の行動および対人認知についてインタビュー調査を実施した。なお、インタビュー調査は半構造化面接法を採用した。質問は「トップアスリートから直接受けたことのあるアドバイスや指導などのサポート行為で、あなた自身の競技者としての意識に影響を与えたサポート内容を具体的に教えてください」から始め、対象者に思いつくだけ多くのサポート行動を回想してもらい回答してもらった。回答内容は IC レコーダーで記録した。

(2)(1)で明らかとなった項目を整理し、日本代表選手（元日本代表）の行動・態度およびサポート行動を測定するための尺度を作成する。

上記の検討を実施するために、(1)で抽出した項目について、調査協力者の専門家 4 名と協力して、質問項目の選定を行った。選定した項目を基に質問紙調査を実施した。研究１では、大学生競技者 297 名を対象に調査を実施し、「トップアスリートの行動評価尺度」を作成し、スポーツ傾倒意図モデルとの検討を行った。また、研究２では、トップアスリートの存在の内在化過程を表す「トップアスリートアイデンティフィケーション」とスポーツ傾倒意図との関連を検証するため、大学生競技者 412 名を対象に質問紙調査を行い、トップアスリートの内在化過程とスポーツ・コミットメントの関連を検証した。研究３では、大学生競技者 350 名を対象に質問紙調査を実施し、「トップアスリートのサポート行動評価尺度」を作成し、スポーツ傾倒意図との関連を検証した。

(3)(2)で作成した尺度を援用し、青年期のスポーツ競技者を対象に全国規模調査を実施し、オリンピックや世界選手権等の国際大会で活躍する日本代表選手の行動および対人認知を基軸とした競技スポーツ傾倒意図を検討する。

研究４では、上記を検討するため、九州地区、関西地区、関東地区に所在する大学生及び高校生競技者、1,130 名を対象に質問紙調査を実施した。

４．研究成果

(1) 研究１：トップアスリートの行動評価尺度の作成および、スポーツ傾倒意図モデルの検証

a．トップアスリートの行動評価尺度の信頼性・因子的妥当性の検証

スポーツ心理学に精通する研究者 2 名、スポーツマネジメントに精通する研究者１名の協力のもと、尺度項目の選定を行い、6 因子各 2 項目の計 12 項目を暫定的なトップアスリート行動評価尺度を作成した（表１）。

表１　トップアスリート行動評価項目

因子および項目
社会貢献行動
出身地や故郷のために地域貢献している
競技のみでなく、スポーツの普及・発展に貢献している
競技以外での努力行動
語学の習得などスポーツ以外のことにも努力している
海外など異なる環境でも活躍できるよう順応する努力をしている
競技での努力行動
常に高いモチベーションを維持し自分の弱さや欠点を克服するため努力している
年齢や体格などの生理的な限界に挑むための準備や練習を徹底的に行っている
挑戦的行動
一度は挫折するも再挑戦し続けることができる
どんなに小さな可能性でもそれを信じて競技に取り組んでいる
スポーツパーソンシップ
試合に負けた時でも相手への敬意と称賛を行っている
試合に勝った時、手放しで喜ぶだけでなく、相手への敬意をきちんと払っている
感謝する心
支えてくれている人への感謝の気持ちをきちんと伝えている
試合や練習で使用する施設・用具などを大切に扱っている

トップアスリート行動評価尺度について、6 因子 12 項目すべての内的一貫性を確認するため、クロンバックα係数を算出した結果、「社会貢献行動」因子が.78、「スポーツ以外での努力行動」因子が.79、「スポーツでの努力行動」因子が.85、「挑戦的行動」因子が.77、「スポーツパーソンシップ」因子が.87、「感謝する心」因子が.78 となった。次に、尺度の因子的妥当性を検討するため、検証的因子分析を行った結果、GFI=970, AGFI=.934, CFI=.991, RMSEA=.044 となった。以上のことから、トップアスリートの行動評価尺度の信頼性・妥当性は確認され、作成した尺度項目のワーディングに問題がないことが示された。

b．トップアスリートの行動とスポーツ実施者のスポーツ継続意図の関連

トップアスリートの行動とスポーツ実施者のスポーツ継続意図の関連を検討するため、トップアスリートの行動評価を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルを検証した結果、GFI=.985, AGFI=.910, CFI=.989, RMSEA=.080 となった。また、パス係数を確認したところ、「挑戦的行動」および、「スポーツパーソンシップ」から競技者アイデンティティー、競技者アイデンティティーからスポーツ・コミットメントへのパスが有意であることが示された（図１）。

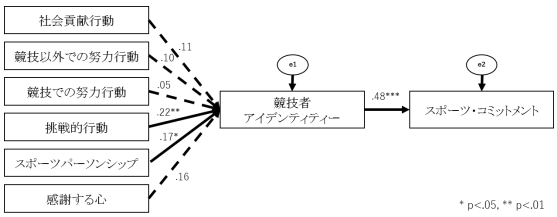

図１　共分散構造分析結果

以上の結果から、わが国のトップアスリートの挫折からの再挑戦および可能性にかける挑戦行動や試合等での紳士的なふるまいを認知することが、スポーツ実施者の競技者としてのアイデンティティーを高めさせ、そして、スポーツ・コミットメントを形成している可能性が示唆される。この結果は、社会心理学領域における見解と同様の知見を得たと考えられる。社会心理学領域においてTyler and Blader(2013)は自分の所属する集団や社会が高地位である場合、人々はそこに所属していることに対するアイデンティティーを強め、行動に対するコミットメントを増大させているとしている。すなわち、本結果と合わせて考察すれば、所属する国において、オリンピックなどの国際大会で活躍する自国のトップアスリートの行動を認知することは、スポーツ実施者の競技者としてのアイデンティティーを強め、スポーツに対するコミットメントを高めている可能性が推察される。また、Bush et al.(2004)は、トップアスリートから発信される態度・行動というメッセージは、青年期のスポーツ実施者に強い影響を与えていることを示しているが、本研究ではとりわけ、挑戦的行動、スポーツパーソンシップといった態度・行動が青年期の競技者のアイデンティティーに影響を与えていることが示されたことから、より具体的にどのようなトップアスリートの態度・行動が青年期のスポーツ実施者に受け入れられ、そして、彼らの自己形成に影響を与えるかについて検証できたと思われる。しかしながら、本研究では、内在化の過程、つまり、競技者アイデンティティーを形成するに至るまでのプロセスは検証されていない。今後の研究においては、アスリートの行動を認知し、それがどの程度、スポーツ実施者に内在化され、そして、スポーツ傾倒意図に繋がるかを検証することでより詳細にトップアスリートとスポーツ実施者の関連について検討することができるであろう。

(2) 研究２：競技者アイデンティティーの内在化過程とスポーツ・コミットメントの関連

調査対象者に対し、トップアスリートの行動評価尺度（研究１）を用い、理想のアスリートもしくは、目標としているアスリートを想起してもらい、彼らの日常および競技に対する行動・態度を評価させた結果、社会貢献行動、競技に対するひた向きな姿勢、スポーツパーソンシップ行動など、大学生競技者に目標とされるトップアスリートは様々な面で行動・態度をポジティブに評価されていることが示された。次に、評価したトップアスリートを大学生競技者がどの程度自身に内在化させているか評価するため、アスリートアイデンティフィケーション尺度（Bergami & Bagozzi, 2000）（図 2）を用いトップアスリートと自身のイメージがどの程度重なっているか評価させた結果、重ならない群が 195 名、多少重なる群が 177 名、重なっている群が 40 名となった。

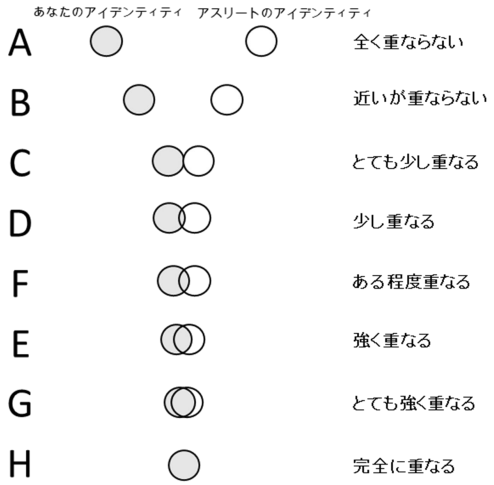

図２　日本語版アスリートアイデンティフィケーション尺度

トップアスリートと自身のイメージの程度により群分けされたサンプルを独立変数とし、スポーツ・コミットメントを従属変数とし、分散分析を実施した結果、F=11.69, p<.001 となり、有意差が認められた。また、Tukey 法による多重比較を実施した結果、重ならない群（M=23.96）よりも多少重なる群（M=25.81）、重なっている群（M=26.60）が有意に高い傾向が認められた（p<.001）（図 3）。すなわち、トップアスリートの行動・態度を自身に内在化している大学生競技者ほど、競技者アイデンティティー、スポーツ・コミットメントが形成されていることが示された。

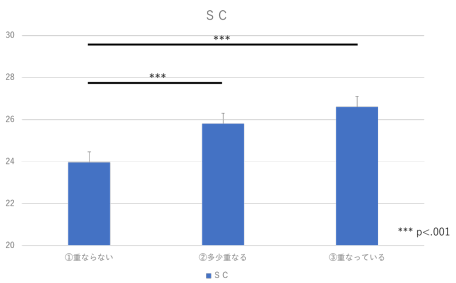

図３　内在化程度とスポーツ・コミットメントの関連

Mofokeng, et al.(2015)によると人は所属する社会において、自身の社会的役割を内在化することでアイデンティフィケーションを形成し、形成されたアイデンティフィケー

ションはある行動に対するコミットメント形成を促進するとしている。すなわち、本研究の結果では、大学生競技者にとってスポーツの世界の第一線で活躍するトップアスリートの行動・態度を内在化することが競技スポーツへの傾倒につながっている可能性が推察される。

(3)研究３：トップアスリートのサポート行動が大学生競技者に与える影響の検討

a.トップアスリートのサポート行動評価尺度の信頼性・因子的妥当性の検証

まず、トップアスリートのサポート行動を評価するための尺度を作成するため、競技スポーツに関わるソーシャルサポート関連の先行研究（萩原・磯貝，2013a;2014a，Rees et al.，2004;2007）および、事前に行ったインタビュー調査（トップアスリートからのサポート経験のある学生競技者 18 名）の結果に基づいて、調査項目の精選を行い、2 因子各 5 項目の計 10 項目を暫定的なトップアスリートサポート行動評価尺度を作成した（表 2）。

表２　トップアスリートサポート行動評価尺度

No.	Items	Mean	SD	α係数
1	落ち込んでいるとき一緒に頑張ろうと勇気づけてくれる	3.95	.92	
2	不安になっているとき、励ましてくれる	3.96	.96	
3	あなたをスポーツ仲間の一員として尊重し、評価してくれる	4.07	.81	.85
4	自らの経験から熱いメッセージを投げかけてくれる	4.02	.91	
5	自分の良いところをほめてくれる	4.10	.87	
6	問題解決のために、アドバイスをくれる	4.23	.81	
7	あなたが抱えている問題を解決するために、一緒に取り組んでくれる	4.03	.87	
8	技術面でわからないことを教えてくれる	4.31	.81	.87
9	トップレベルの素晴らしい技術やパフォーマンスを見せてくれる	4.26	.80	
10	自分自身に打ち勝つためのノウハウを教えてくれる	4.07	.84	

作成した尺度について、2 因子 10 項目の内的一貫性を確認するためクロンバックα係数を算出した結果、情緒的サポート因子が.85、手段的サポート因子が.87 となった。次に尺度の因子的妥当性を検討するため、検証的因子分析を実施した結果、GFI=.975，AGFI=.940，CFI=.989，RMSEA=.052 となった。

b.トップアスリートのサポート行動と大学生競技者のスポーツ傾倒意図の関連

トップアスリートから提供されるサポート行動と大学生競技者の競技スポーツ傾倒意図の関連を検証するため、トップアスリートのサポート行動評価を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルを検討した結果、GFI=.992，AGFI=.961，CFI=.993，RMSEA=.072 となった。また、パス係数を確認したところ、情緒的および手段的サポートから競技者アイデンティティー、競技者アイデンティティーからスポーツ・コミットメントへのパスが有意であることが示された（図 4）。

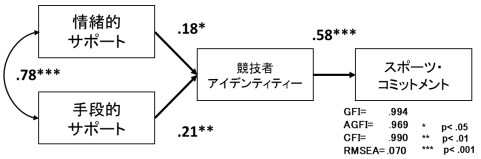

図４　スポーツ傾倒モデル

トップアスリートから提供されるサポート行動と大学生競技者の競技スポーツ傾倒意図の関連を検証するため、トップアスリートのサポート行動評価を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルを検討した結果、モデルの妥当性が示され、また、すべてのパスが有意であることが明らかとなった。特に、情緒的サポート、手段的サポートのパスの強さを比較すると、手段的サポートの方が情緒的サポートに比べ、競技者アイデンティティーへの影響力が強いことが示されていたことから、競技者としての意識の醸成にはトップアスリートの手段的サポートがより有用であることが示されたと思われる。すなわち、トップアスリートが「技術面でわからないことを教えてくれる」、「トップレベルの素晴らしい技術やパフォーマンスを見せてくれる」など、手段的なサポート行動を提供してくれることが大学生競技者としてのアイデンティティーを形成し、スポーツ・コミットメントを醸成している可能性を示している。先行研究（萩原・磯貝，2013a; 2014a）では、両親やチームメイトなど身近な他者においては、「ほめてくれる」、「励ましてくれる」などの情緒的なサポートが、より競技者アイデンティティー形成に影響していると示されていたが、その結果とは異なる知見が本研究によって得られたと考えられる。

(4)研究４：大規模調査の実施

トップアスリート行動評価尺度（萩原ほか，2018）、トップアスリートのサポート評価尺度（萩原ほか，2018）、競技者アイデンティティー尺度（萩原・磯貝，2013）、スポーツ・コミットメント尺度（萩原・磯貝，2014）を援用し、全国の大学生競技者を対象に大規模調査を実施した結果、以下のような結果が示された（図 5；図 6）。なお、調査対象者 1130 名のうち回答の得られた 1068 名を対象に分析を行った。また、トップアスリートのサポート評価尺度については、「トップアスリートから受けてみたいサポート」と定義し、期待されるサポート行動の評価をさせた。

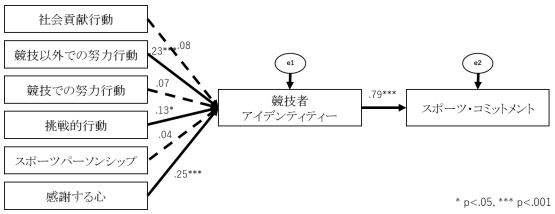

図５　トップアスリート行動評価モデル

トップアスリートの行動評価モデルを検証した結果、GFI=.997，AGFI=.982，CFI=.999，RMSEA=.033 となった（図 5）。また、パス係数を確認したところ、「競技外での努力行動」および、「挑戦的行動」「感謝する心」から競技者アイデンティティー、競技者アイデンティティーからスポーツ・コミットメントへのパスが有意であることが示された。以上の結果から、わが国のトップアスリートの語学習得やスポーツ以外の異なる環境への挑戦など、競技以外での努力行動が学生競技者の競技者としてのアイデンティティーを高めることが示された。また、挫折からの再挑戦お

よび可能性にかける挑戦行動をさせてくれている人たちへの感謝する心や態度が、他者であるスポーツ実施者の競技者としてのアイデンティティーを高め、そして、スポーツ・コミットメントを形成している可能性が示唆される。以上のことから、わが国を代表するトップアスリートの行動・態度は学生競技者の意識へ影響を与えていることが示されたといえる。

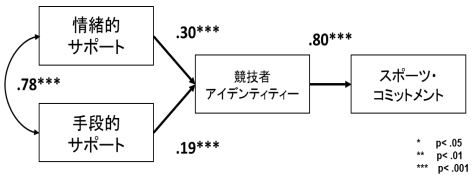

図６　期待されるトップアスリートサポート評価モデル

期待されるトップアスリートのサポート行動評価と大学生競技者の競技スポーツ傾倒意図の関連を検証するため、トップアスリートのサポートを基軸としたスポーツ・コミットメントモデルを検討した結果、GFI=.991, AGFI=.954, CFI=.994, RMSEA=.091 となった。また、パス係数を確認したところ、情緒的および手段的サポートから競技者アイデンティティー、競技者アイデンティティーからスポーツ・コミットメントへのパスが有意であることが示された。以上の結果から、期待されるトップアスリートからの支援行動は情緒および手段的サポートの両方を学生競技者が求めていることが示されたといえる。前述の研究３では、実際に支援を受けたことのある大学生競技者では手段的なサポートがより強く競技者アイデンティティーに影響を与えていたが、本研究では、そのような差異は認められなかった。期待と実際では、学生競技者の感じるトップアスリートからのサポート行動に差異があることが推察される。

〈主な引用文献〉

①萩原悟一，磯貝浩久：競技スポーツにおけるコミットメントの検討―日本語版スポーツ・コミットメント尺度の作成―．スポーツ心理学研究，41(2)：131-142，2014.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

①Hagiwara, G., Akiyama, D., Kuroda, J., Hagiwara, Y., Shimozono, H.、Relationships between the elite athlete identification and sport commitment for Japanese collegiate athletes 、 International Journal of Physical Education, Sports and Health、査読有、5(2)、2018、30-32
http://www.kheljournal.com/archives/2018/vol5issue2/PartA/5-1-78-572.pdf

②萩原悟一、下園博信、黒田次郎、大下和茂，秋山大輔、中田征克、トップアスリートの行動と大学生競技者のスポーツ継続意図の関連、教育医学、63(3)、2018、260-265.
https://www.ebook-stand.jp/ebook/JSEHS/289/

③萩原悟一、下園博信、黒田次郎、秋山大輔、萩原裕子、トップアスリートのサポート行動が大学生競技者に与える影響の検討、九州スポーツ心理学研究、30、2018、66-67.

④Hagiwara,G.、Relationship between sport participation behavior and the two types of sport commitment of Japanese student athletes、Journal of Physical Education and Sport 、 17(4) 、 2017 、 2412-2416.
http://efsupit.ro/images/stories/30dec2017/Art%20267.pdf#search=%27Relationship+between+sport+participation+behavior+and+the+two+types+of+sport+commitment+of+Japanese+student+athletes%27

〔学会発表〕（計６件）

①萩原悟一、下園博信、競技者アイデンティティと競技スポーツコミットメントの関連：2 つのコミットメントの側面に着目して、日本運動･スポーツ科学学会第 25 回大会､2018.

②萩原悟一、下園博信、黒田次郎、秋山大輔、萩原裕子、トップアスリートのサポート行動が大学生競技者に与える影響の検討、九州スポーツ心理学会第 31 回大会、2018.

③萩原悟一、下園博信、秋山大輔、大下和茂トップアスリートの行動とスポーツ実施者の競技スポーツ継続意図の関連、日本体育・スポーツ経営学会第 40 回大会、2017.

④萩原悟一、競技者アイデンティティーの内在化過程とスポーツ・コミットメントの関連―大学生競技者を対象に―、九州体育・スポーツ学会第 66 回大会、2017.

⑤萩原悟一、日本語版スポーツ・コミットメント尺度２の作成、九州スポーツ心理学会第 30 回大会、2017.

⑥Hagiwara, G.、Study approach to increase participation of collegiate athletics in Japan: Based on sport commitment researches 、 East Asia Sport Exercise Science Society 2017、2017.

〔その他〕

ホームページ等
http://people.nifs-k.ac.jp/hagiwara/

６．研究組織

(1)研究代表者

萩原　悟一（HAGIWARA, Goichi）
鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・講師
研究者番号：30734149